

# 徳川家康公 と駿府

Tokugawa Ieyasu in Sumpu

元常葉学園大学教授

織田元泰氏

Motoyasu Oda



経歴

1937年、静岡市生まれ。東京教育大学文学部卒業。静岡県立高校教員を経て、静岡県教育委員会では県史編さん事業に従事。その後、県教育委員会総務課長、静岡城北高校長、沼津東高校長、静岡市教育長、常葉学園大学教授等を歴任。専攻は近世城下町研究。共著に「駿府の城下町」「静岡県の百年」等。

## 家康がつくった先見性豊かな駿府城下町

現在の静岡市中心街は、徳川家康が骨格を作った駿府城下町が前身である。家康と駿府の関係はきわめて深く、七十五年に及ぶ生涯の三分の一は駿府を居住地とした。

最初は今川氏の人質だった幼少期から青年期にかけての十二年間。次は駿遠三甲信の五か国を領有し戦国大名の雄となった壮年期の五年間。最後は將軍職を秀忠に譲り、駿府城に隠退した慶長十二年（一六〇七）から逝去する元和二年（一六二六）までの晩年の十年間である。この時期の家康は、諸大名や外国使節の表敬をうけるとともに、大御所として幕政に君臨し、駿府は事実上の日本の首都であった。

駿府の町づくりについては、慶長十四年（一六〇九）駿府の有力町人の助力のもと

「町割」が行われたという記録があるが、実際には家康の駿府城隠退の前後には着手されていたと考えられ、家康にふさわしく民政に配慮した先見性豊かなものであった。

その第一は、賤機山西麓の妙見下から弥勒・中野新田に至る通称「薩摩土手」の築造である。長さ四・三km余、高さ五・五mの大規模なもので、これによって安倍川の流れは西方に追いやられて藁科川と合流し、駿府城と駿府の町は安倍川の水害から守られることになった。薩摩土手の称は薩摩藩の御手伝普請を思わせるが、明確な資料は確認されていない。

第二は駿府用水といわれる水路の整備である。安倍川に三か所の水門を設けて取水し、清冽な水は街区を貫流して市街地では防火用水として、下流の農村では農業用水



図]土佐光成作 18世紀初頭 原本所蔵:駿府博物館(公益財団法人 静岡新聞・静岡放送文化福祉事業団)



「薩摩土手」(静岡市葵区井宮町の妙見下から弥勒方面を望む)



「札之辻碑と札之辻町碑」  
静岡市は駿府96か町の町名碑を設置しています。札之辻は高札場(町奉行所の公報)のあった場所で、静岡伊勢丹角の交差点にありました。

として活用された。今日、市街地ではほとんどが暗渠となり、わずかに浅間神社前や市役所前の水路で、その面影をしのぶことができる。

第三は駿府市街地の整備である。駿府城下町は江戸時代の他の城下町と同様、武家地と商工業者等町人が居住する町方が区分され、さらに寺社地があった。

武家地は城内及びその周辺部に上級武士が、番町地域に下級武士が配置された(大名不在の番城時代となると明屋敷と称し、田畑となった)。

「駿府九十六か町」といわれた町方は、一ブロック五十間(約九十m)四方の碁盤目状に整然と区画された駿府城南面の地域(現在の中心街で基本的プランは当初と大きく変っていない)と、伝馬町筋・安西通など従来からの街道筋に配置され、当初は同業者が

集住することが一般的であった。呉服町・七間町・茶町・大鋸町・大工町など江戸初期からの町名が今なお残存している。

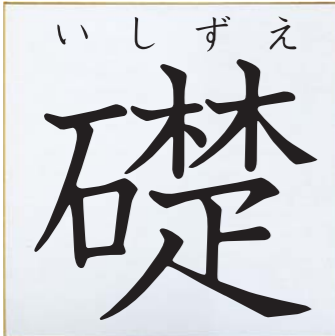
一方、寺院は、寺町(現在の常磐公園)のほか本通・伝馬町周辺等に多く配置され、城下防禦の役割を担った。

家康在城時、人口十五万とも十二万ともいわれた駿府の繁栄は、寛永九年(一六三二)將軍家光の弟で駿府五十万石の大名であった徳川忠長の改易とともに終った。以後、駿府に大名が配置されることはなく、武家人口は激減した。寛永二年(一六二四)の記録で九十三を数えた町数は、元禄年間に九十六を数えるが、以後新しい町が増加する動きはなく、人口も二万五千〜一万八千前後で推移し停滞したままであった。結局のところ駿府は家康時代の城下町の姿を色濃く残したまま、幕末を迎えたのである。

### 私の一文字

織田元泰さんが選ぶ  
徳川家康公を表現する一文字。

関ヶ原の戦を経て豊臣氏を滅ぼし、徳川政権を確立。260年余継続する幕藩体制の基礎を固めました。



著書のご紹介



「駿府の城下町」

静岡新聞社 1983年刊

「家康の町づくり」「駿府城下の女たち」などをテーマに、若尾俊平、小和田美智子、織田元泰ら6人の執筆者が駿府に関する様々な問題点を追求した書物。参考文献も記され、駿府城下町に関する手頃な案内書。